枇杷園類題發句集 上

へ 5
4653
1

梅花園先生撰

枇杷園類題發句集

尾陽　東辟堂藏

16553

北海道立図書館

北山の愚公功ハ引
子の寓言ものの人
やうなる愚も亦
如し今梅花園主人
朱杉陳生雁乃と世

昭和十一年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

門へ5
號4653
巻1

有一の子をもつ人の
卵と毎年一度と夜ふかし
もとめて伴はあるべき
月の落るを見て
人はしも憂なれと

夜明の吸物も
種しいなの
とそして樟小
の名をつけ進む造化
の神の手もかすかなる

實撰者のいとゝしひつゝ

乙爾稲

立道

松尾翁句集毋年廣まりて
のち小後編の俳諧しゝと
事なるもそれを沒せし紀
貴の德ロそしゝて高くして
風潤後嘆ふ人多くゝ事を
實に芭蕉翁の一大家
初心の編ゝ高原色ゝ

ちまと句集そ精撰の高作
あかつきの句數多くは調後
學ふか其題を得ることの
まれ〳〵多し士朗叟
一世の句をあつ多四時に雜を
わかつの初學ために乃ち多
かふ業ために類題して書名も

あかつきの句集は
志ゝ志ゝ河内叟八篤實謙遜
ひたすら名聞を厭ふ生涯こそ
其口号みつからは原〳〵四道
を原もはなはだ家に集ま
ものたるもあくまで峰麻呂
數に洩さ事かの曼倩

二十二萬言ホシ　加藤保[illegible]
机ヨリ　筆ヲ[illegible]シ　[illegible]
[illegible]〳〵　師德[illegible]仕ル

文政乙酉秋

梅花園梅間記

類歌士朗雙紙句集卷上

春之部

巢日

何ゴトモ〳〵て玄立ありさうな
年賀

とつむやをくよ年の笑しき

正月

灯ハ見ゆる戸も宵ハ寂寞
元日

入り日年乃出もてよ雪ハ雲

花の春　俤つくしくそたまかの乃表

月雪なやしなりしてそ花ぬ表

元日子日

松ハまし志ちつ乃けなもと花の表

ましぬとそおのの表ましし花乃春

二月

月雪ぬ表しめも年の二月ぶ

春も二月ふ乃ふ乃表

松乃けやきのしかハ初乃ふ乃ハ月

筑波山麓のさと秋枝氏需ア

蕨煙る初の糸も雪ま白ひろり梅の岳

松の図　蕨は戸や立初て見ぬは雪ぬ内

若菜　ひろ乃揚は揚ぬ呂ろ〳〵う年

老うつむ蕨乃ろと人はりしぬ乃ふ

弱れるぬ乃ふ乃若菜ぬ　畑迫

策雲居醉歩

そしをしも志〳〵で乃ふ乃若菜を摘ぬる

新乃都うもらし志まぬけうなぶ

ゐるうすうすく

梅若菜　道くさくハ蜜のこかをる　梅ひろ分
睦月ちらほら夕ゝれ杉おとろ霜を
ゆくゝよ移れ生垣ゝをとるたゝ
このゝしき菴あり雪月の雪と
いつゝ見ゝ武蔵そすゝく蕨を
おいゝゝ雪を

雪解　世ゝ雪もとゝ苔ゝうゝん身ゝ光
雪げしの面ゝ陰ゝり　於廉山

雪とけの水よ吟なり　川子雪
春雪　春の雪　雪のさゝぬ　枝のなし
梅間亭
さゝ世雪ゝくゝみゝん　ゝ乳春の雪
梅人よ雪ゝ雪ゝ　春乃雪
土山すて
残雪　きくのゝ雪ゝ　梅ゝ子傳ゝ郎
菜芽　医ひゝくゝ芽ゝ芽よおゝ宮都の山
芦の芽や　皮ゝ　ゝ雪ゝ雪ゝ

我よ句なし芳草こゝの墻ぶ
けゝらやゝ又もとてる菴の建

吉井きよ屋

芳草や横よ切しる松のみ
こゝひるまきをも咲らん月と梅

梅ゝ香や俗ぬましれ妻なる
梅よ月をゝせく屋をは書月枕
梅垂きゝ門や其角ゝれゝし
蟄因社踏青

梅ゝは梅ねよハ柳をゝしの糸
梅よ来ぬ名ゝまゝ屋ゝや小盃
千代倉ゝて芳の笑を梅く
梅ゝんゝも芳りんゝも消う邦

暁臺叟初七日

ゝ笑梅りんてゝ命ゝき夕名
世ゝのゝゝき匂ひのゝるゝや月ゝ梅
俳諧のゝき本ゝりゝうめの毛
玄峡て梅をゝぬ日ハなゝり茶

春さるきう人の心う梅を愛

初瀬まて

賀茂のくまゝ乃梅そうめ花

梅うゝやかゝしあるくも雪月花

造花梅を造るゝ月のひを

おすゝ後うとけ和梅を園

集て梅うゝ雪は分をきうれハ

造物者のゝくもうれを造るあ世乃

ゝとゝとゝまゝ高くりてり

月や雪ゝゝや雪の梅花

月雪

ゝゝゝる新や霞木のゝ先の花

白梅の大けしき朱野中ゝ

雪西巷法舎

散梅ゝゝゝ墨深れ月ひゝ

あゝしゝんくもよくと梅の白ゝ

ゝゝ嶽や吟ゝそうされて梅花園

梅花園即事

やさしくや年よりまさるうめの色
梢まるふ咲るうめ乃花ひとつ
芭蕉翁肖像開眼
眼も鼻もひしゃげうめの花
菅公千年忌亀尾天満宮
影家法樂
玉鬼るまやあるじ小さ梅は咲
梅花雪一枝久歌
春宵一刻値千金

亀戸の門へうめ木よりうめ
山ゝるく水長ー梅ゝるく
御山なるるうめ木て梅乃花
江の上や二人うしてうめの色
五十ゝ山の慧六十八山は半腹
老の山路大波しらあもとゝるく
梅ゝるつくいく本ゝ海也
山よ古ゝ書あり梅の下伏ひ
梅屋園の梅見八二月二ゝ

あるじ多き事まて市の為体
拔しられハ
多数来る是世ゝの梅ハ心多し
身雪ハ梅ゝ二月乃あるしゝ
梅ゝ雪ゝ　ゝつこ丈竹の柔れ本畑
ゆゝくと棹ゝ　梅花園の
梅ゝ間と漕まゝれハ放ゝ小艇
ゝ行くゝ雪のごとく棹ゝ行ぬゝ
おりゝの舟ゝ流れ面白れ梅や

あるゝ折ゝ流の乃ゝ乃ゝ
むゝ流ゝ行ゝ小舟をつゝる梅の花
子のやゝよ種ゝれ行ゝ梅乃花

九岳亭

梅ゝ香や数の中まて帰ゝり
方ゝ茅屋ゝ高ゝ心ハ琵琶
湖上よ拾てふ
様ゝ雪ゝあるゝの新ゝ志賀の山

梅花園

柳

いつ苔うち詠の塵宮に柳見ぶく
御嶽の雪ふきうつる柳うな
猿川の猿うきおろ柳うな
青柳とうき世の塵ちゆうう
青柳やそうく吹つく淀の犬
伊勢にて
青柳乃面や小家のひとつ口
柳ちやもしし義まく毎
花柳つる夫柳いよく新う

鶯

矢矧にて
青柳の糸ほ迄八百里の那
柳青しうやいうけ去を弾し
青柳宿
青柳の岩根く毛茅白し
一おう川渡る出る柳ゆ那
鶯と嶋ゆうゆゆへいな
ゆしまちら只鶯ゆ心哉
鶯と溝もなうれう小舟うな

ほとゝぎす　聞　峯の松
里なれぬ　聞　峯の木の芽

題　聞　水滴

聞よ百しほ　鳴　水一斗
叶ふ事数　聞　名なるべし
うゝひ貝の　宿ハちいさき　身なれ
聞乃　梅　鳴　や　三ヶ月　身
聞とかゝも　鳴　身　梅
小のゝ小　色　の　本　とて

庭掃　男乃　告　ゆ　然
鶯　と　ゆ　な　梅　ま　垣根　て
聞　手　清　澄乃　水　ゆ　なれ
ゆて　や　聞　鳴　ぬ　豆　の　身
ゆ　や　鳴　ん　聞　見　ゆ　垣　れ　内
箱根山
聞　れ　簾　ゆ　ゆ　く　こ　ゆ　ぶ
鳴　ゆ　く　聞　年　ま　ゆ　ゆ
聞　ゆ　ゆ　も　浮　世　と　竹　の　中

蕚ちようまき あるりる 二度三度
我庵ハ 西 月松
うめの柳 ハ一里も 樣子郎

椿
素風

素風や 徇 あてこする 椿 立
四月十三日 伊勢 ニて入寺
柳 子孫 ゆ
素風やちこ 踊 乃 柳 子孫
ゆももんあまも 孫 あん 素の風

雁鴨
雁鴨のつくや 餘 ゆ 物 ゆめ

白魚
白魚のあらとはりんこく松のけ
蓑松
うつくしきかよ小松のみとつぶ
蜑
舟人 ひとつ ゆ 船 ゆ
物螺貝の初 涙 ゆこりる 蜑 分
ゆよりれ ゆくりくとり 蜑 れ
古屯 乃きりん ゆ ゆあさ 蜑
ハ 立 ゆ 庵 の 板橋 流 ゆ
蜑 ゆや 海 ゆ れ ゆける 涅槃像
涅槃
涅槃 ゆ 死 ゆ ハ 佛 ゆ

盜人のうへしらくもりぬ涅槃像
新買ふり人へとては涅槃会
朧月
朧ゆゑ寺もありうり松の月
家遊み夏もあり郷月
初月ようりゆれ寄る月乃老ぐ
春月
春の月雑るの春こゑ寄るむきぬ
春乃月蘇生の里と更ろう
少年行
春の月駘ゆしらと並へうま

雑子

春の月松よりあまり外よりあるく春
糊春小雲の鳴しき所乃月
高浪
多車よのつらく歩れハ春の月
帰り来く鳴の焼きしれ多
ゆらゆとハもよ雑子鳴柳子ぶ
雲うつりして又鳴きう春武
幻住庵
松ものきしく閑へうり唐の雨

面よ明く雑子のうこゝぬ畑ぶ
海苔や雑子はれ付き人の家

大森山中

うちあつまり雪れきゝ夫ゝ
雑子頬白ふ山あつゝや鳴鳥
樽雲や塩竈ゆう色はきしれ麦
湯杖よ雪おを彩れ乙鳥哉
乙鳥乃蝶もなゝぬ小色う那
塩木つむ中と並れ法来ぶ

燕

帰雁

雨ちゝつゝ並ふ垣根ぶ
帰ねゝ居なゝ芦乃二葉ぶ

西湖

今一度望四ゝちよ帰雁
雪寒又海雁となりよ多物
秋柳ゝる心やのこちらん
のゝめゝハ根を浦ゝ山ちの丁
蝶多やゝゝ乙果くゝ春の居
ゝ多日ちうきこゝ揚雲雀

春雁

雪雀

雀
蝶

父母はありうを作る時雀
浮まくらとまくを蝶り蝶まる

小所讃

蝶鳥
蛙

ちゝ母れ稚ご人の対ふろ
浮しつも花れなりきと鳴ろ
蛙やめはひくくくと雨乃鳴
夕ゝ鳥やみなきやしはなく蛙
ゑゑゑゑ赤ゑ水り蛙ぶ

茅場池

つくくくと茅ひかりり夕ゝろ
笠青や蛙鳴花れぬ色却蛙
人も蚊へ蛙もふくく山家ぶ
棚格や乞よくく蚊よくく蛙
葉火ゝけハひよいくと青蛙ぶ

陽炎

茅枝ぬやりけふ遠てりは日
陽炎の青と白へうを蛾乃鼻
けりふやつふと落しふつや
陽炎を沐しき物と思ふし

猫恋　山ぶきの一枝ハうつくしく猫の恋

紅梅　梅ぶきよりあれ猫のゆり恋ぶ

寄居虫　なりれもて月もうつくしなれやうつ寄

田螺　寄ぶくまけハ淋しき田螺ぶ

侍花

所思

思ふ人を淮う田ぶし伏後住居

花もちり月も入ぬり田かぶ売

ちるくい千世話しく咲ぬ花の友

三月廿日吉松亭ようまして

はなすきこそこそしハむの夏き

年ぬめ月の沈ぶ松ぶ花ぶ咲

出ぶ出ぶ月ぶ出ぶ月ぶ出ぶ月ぶ出ぶ

湖へうぶハ事ぶ出ぶ月ぶ出ぶ

神樂

ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ

菊根

菜の家ぶ月ぶ二ぶ月ぶ月ぶ月ぶ

春草

朝ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ

苗代

ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ

稲ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ月ぶ

菜花

菜乃花や志賀の山越霞こめ
菜の花を手に大名うねる蒙古邦
枯り肥ゝ菜の実すゝめ多なし
桂五亭

菜乃花や漆めよ雀れ柿太
かゝいろしも歌をめさせ
けしきもりへ乙女花ぎき
ゆ浮ゝ
ゆの玄一口蒙古うゝ嘗雀

種蒔

松ゝ伊勢ゆゝ乙の宮宵月夜
夕月ゝ淋し種蒔ゝ
家ゝ賀ゝ吉人
善ゝ顔の久ゝ
春

ゝき事ゝ世ゝ家ゝ実
路巣園中ゝ蒼蝿一枝移し
載ゝ
ゝゝ髭搖ゝ乃色
春ゝ
喜ゝ

春水　春の水長閑へ落て影永し
春海　住吉の春より出入松乃一本の南
　　凡化亭得春字
春衣　春の衣紅あるさくら地ハ白うす茶
　　醉後
春の夜やおこるの対し　枕
春の夜ハおり詰ハ黒茶椀
春の夜乃春の夜うつくしく部ぶ

春の夜を心ゆきもなく案
大きなる月の四方なき二月哉
二月
更衣　きさらぎや入なれ座を脱ぎ
凡巾　いうけく沸き松の程ぶ
　　凡巾さうれく森ゆ森れ哉
永日　屋根ふきよ雛ハ暮ハ永し
暮春　紫れ戸や寂てとろろと鳴る
雲入雲　鳥雲よ入ぬ谷乃つゝみ
雛　雛ハ駕籠れ乃ら見へ初ぬ

まりこれ宮

桃

寿老人讃

汐干

花

久能山の藤

汐干とも志ほ〳〵浪間なる

山寺や花ゝ上ゝ咲ゝ

長良里

霧もまぬかれの花ゝ

ゝゝ我をゝよゝ夕ゝれ花ゝ

梅下三宮のあとゝ

ゝつゝふ三ゝ

芭蕉翁のあとゝ

むしろかつぎやの爲度の
山路せんとて爲浪花里よりの
繁書をとりよりて花の孫麻呂事
年宮三回忌
ちさきまをつゝく父よと塚の雪
花墨時々はるかに見れもひるり
問ふまきらを盗人はこゝろぶ
山里の花を手孫抱むしろ哉
嵐山

花をなこのも雪さぬ嵯峨の宮
ふるを嵯峨義よ拾く
淋しうれとうふをを思ふ哉の外
賜亡人吳井
よき事をいひてまき初よ花乃外
眉山の花りんと雪高嶺の
文庫で見ふく水の後ひく山あ
ふるる後初るを乃山乃やく
位をやとまひろれい

花乃木ゑ孤ひとつ咲ける

歸路

岳のてりいのくれる山路の秋

東行首途

いなめしてそこそこ花見哉

佐夜の中山すぎ

ゑ義ほとゝぎす花のうゑ山の山路哉

木母寺

花ゑ祝いとゝ墨のうちゝん

宋美亭

年くゝゑ花見捨のうゑゝり

姥捨山

哉ゑ泣ハ又ゝ山や姥ハ捨らもん

扇面海老図

ゝき花見形ゑ海老の髭の先

紀ゝゑ花見るやゝの菜汁ゝ

ゝゝゝや哉ゝ宮乃影一弦

芭蕉堂新成美肖像を画

きりぎす

妹背もうるやとをけし花のうけ

池乃端ゝ一間ゝをうをの岩

壽里やゝ花乃名殊を鳴ゝ鳴

そのゝゝは磨ゝをしとゝ京

蓬萊の匂を自得ゝゝ

色も香もなゝて玄見る眼鼻ゝ

ちゝと来ゝと花と見てゝ自ゝ

山寺ゝゝ

撞木も鼻ゝと花見の泊客

七寺

鉢の子や花見ゝてゝれちせゝ

道ゝ来といゝて玄ゝ二度三度

捨ゝゝき世よりなゝゝ咲ゝ

久ゝとゝゝ所ゝて

この月ゝき屋や梅ゝさし花を

杉桜一本ゝゝきなゝあゝしめ

枇杷園花見

やくそくハみ来る年はきさらぎ
みちくさくさよるとまつる梅桜哉
梅花園千きさらぎなりかつまき
の池の蓮のきっしもまを
明月の一茶をりんと一人
ちりの紅葉ひき
曙や人乃きさらぎ成本乃閑り
品川や海よりくる小さくら
月きへくる春ふさくら咲ゐ者り

東叡山
我人ゝ見ても目出たき桜哉
妙義山
白雲乃名ゆゝこと桜哉は桜茶
相原牧
駒ハあとゝゆゝ笑ゝ山さくら
おくられ土ハ残ゝ生ゝ和ゝ
湖ゝ三ゝ和ゝ童女
桜ゝ三ゝ辛崎の神宮

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

虎見葬

つくづくと見て居れば櫻ぶ

ちるぶきハ又咲きそれきたる春

世の中をかるの西上人乃

[illegible]て朝熊の櫻ぶ

堂

山吹

[illegible]一帖の和さしら屏

白色合せ[illegible]

[illegible]れ[illegible]人形[illegible]

山吹やもろひあらしの鞭の先

久米路れ橋ハなく虫を雪

心してゆけといふ

山吹や久米路れ橋ハ[illegible]

やまぶきハ先あらはし雨乃[illegible]

得書[illegible]家の側[illegible]西行堂

躑躅
花

建てうとしたりとも
本瓜つくり世よこのまゝ居ん
このあさつとひらくる紅梅の家

題福壽山

おのうまれた森れむ笑聖松が
霧雨のふるまれるく庵代家
蘇魚れ伸へれ手葉代
ちくく
春のむかうもうふふう那

行春

鶯ハ梅ヶ咲けども春ハ
り春とあるれむ牛のねうけど
り春や雪れふるる渋谷山
り春ハ梅の高尾山なるも
り春もはう行やら梅乃さ
本居大人孫生の時ない世乃
國へ帰るとなるく
梅阪の梅しれく春れまりなれ
あさくさ二ツ春ゆく蘇の門

[illegible]乃[illegible]
[illegible]
[illegible]千曲川
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]乃名殘
[illegible]
[illegible]乃山

惜夏
[illegible]
春殘

夜之話
伊勢の神宮より詣る世竹里棠子
[illegible]

四月
真九よ神馬乃肥る四月ろ京
下旅訪

卯月
湖邊より卯月[illegible]も三ろ乃自
更衣
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

老庸

更衣　人のうしきにかなうきぬ
屋敷の海をとりるる山ばかりまる
梅ヶ人乃孫孫よりて楚の上
生しくむ人堂とつきるる
うる

灌佛　道ちくく佛ちく海ひろる
牡丹　ちくくと牡丹法ちも坂乃内
芍藥　五六代芍藥つくる　山家ゝな

麦秋　湖山乃春ちまき麦秋秋
杜若　うきつちくうし植ちや　湖田の梅
　　地しちばけ月ひ　弥ぬうれつちき
芥子　白故ちよ影屋ちきき小京ち邦
　　あくしちき人　喫おすりけし法
　　白玉ちのちと苔ふれ蒼ち邦
　　けしれ花ちちれうも動きり
　　けしち苞ちてうしふして
　　桂五亭

松うけやうるもしいまうらと苗子の花
卯の花や秧串なるさしやる 垣根う南
しれ苗と言うく垣のい男う邦

若葉

蕾さうくいつまてこきうらう若葉
古塩殿しく
古塩殿を外う柳乃ワう若ふぐ
柿 椎の堅ふてうワうえう邦

鶯湖

若葉して不二ちやさしき流行の御

宗は戸は朝くおめうワう若ふぐ
世義寺ふ極ふ

夏木立

松風の心ふつうても反木立
伊勢の宗うり御しく孔阜
こうを行か
玉垣やまふうさなき反木立
茂
茂柳
茂柳の面やあしさの反立う
青嵐
楚舟く立てハ舟り言ひし

時の間ゝ日枝ゝ出ゝり青嵐

初松魚　きりゝゝを形川ゝきゝ根源きゝ

ゝゝしいそや吉瀬ゝ知つゝりをゝ

竹の子　竹のゝゝや子供きて寺の門

筍やまゝ四五尺ゝ草の雨

眠さゝふ竹の子をりゝ出ゝゝり

子規　ゝゝけのこふ竹ゝゝ編ゝゝ家世ゝな

ゝゝ鳴ゝゝし和ゝゝゝや和ゝゝき夏

和ゝゝ夏は山ゝゝ女松ゝゝしきゝ

金屏は梅ゝ聖ゝゝり和ゝく夏雲

海鬱深ゝゝ磯やゝゝみねの石ゝ帰

三輪のゝゝゝゝを過ゝて

杜宇和ゝゝゝゝゝゝ山乃奥

鶯声訪ゝゝ夜

家ゝゝさよ子規ゝく書乃経

市ゝ川ゝゝ

川ゝ母やあゝく来ゝゝ和ゝ

ほゝゝきす俗や和明乃めゝの池

祢のいくさをいつも身にはなれず置明
善提山菩提寺にて
念仏をとなへ来りむやうに侍るべきす
等虎菩提の種をうゑる江口の
遊女うら草乃ゆゑ思ひ出る岳松
羅漢の仮ぬ三法ゆをうゑやそ
安といふしるしや江口のかたゝ寂
碑歩
ゆゑ〳〵彼を峠り空を仰ぎ弥陀仏

神明津眺望
川中に鬼嶽あり高く聳ゆ
高よあれハ山かたくき其山ま峰
る朝ぎをふなりのうねをうな
うつくしきかやうる高ぬ置魄
杜鵑ぬもひ抜ても月にうり耶
さりなく人や 杜宇
ゆゑ雨をむ降もとるを朝
住吉の松うるをわかく寄浪

野子山下分ニ三ツもあり此所
飯田氏新墾地
十日あり又も一夕不出帰
陽谷こゝにして此佛乃ふし給ふ
岩屋あり大なるか不動堂を彫
つけり此あるのみなく縄を打て
ゆ〻しくさこゝ降りひくいと
ぬまもまた繁くこゝをさまの
ひとくきんのくや不動ゐあり

甲斐の可都里のゆゑとして嬉しき
さうこゝして予が説話はやとり成
ゞ〻繁りたるは
哀さやはかなし根森れかとくきえ
著きくゝ仲の枕の義ゆゑも
一鼎よりの教をかり寄さもと老乃
幸ひ又ふか嬉し
森ゝもぬと夜明くゝ花ほとゝぎす
四月十日大久保ゆ園中乃

ゆしき我壽とて人も年よ稚初
しらぬといふ名を叢乃ちらし
書付て
風越の時雨をはこへほとゝきす
鳥さへや庭木にも鳴郭公
一聲は後や空にかなしき文字
一雙青眼見山見海
耳ふしく川山わたりて閑古鳥の
閑古鳥
時雨過て又鳴わたりんお鳥

閑古鳥春きましる里乃花の中
曙やむかふる山の閑古鳥
友ほしき折から
菴に来て鳴てくれよ閑古鳥
戸を閉る寺乃鐘や閑古鳥
大年の山中
鐘や山わたりしきかんこ鳥
庭甫亭
夕月や嵐ふきしける閑古鳥

錢苔舊雨

蚊

蚊帳

短夜

五月

夕面白く桜さく五月雨の那
面よりて美芝さうの事ら五月雨
中しくさ五月を言し古馬衣
日比柳原乃温泉よりあらうらう
言のち端午なりさく硯紙をよ
菰粽をもくさうありて山川武ち
出てうさと湯入乃人ばもこと
ゆうさくさ絵しうを手無しなを
あ包先つつさと繁書書

菖蒲

幟粽

幟りんや言ち松乃川法年
此頃やむりおかうばさく粽
言祢しさにいくもなく粽りれ
見うえ乃乃赤小玉ちる競馬
竹酸な 竹祢くまさしうあうり若ば
竹祢の日も人乃来て拾ひ事茶
人の来て祢くさきさ竹の唐
心ありやちいさ事体とうある人
伊勢吉を事の茶店よ拾ふ

田植

田を植る人もうつくしぬいさしちらハ
うえて去る山田を麻れ通る哉
ぬり星の数を田植れ雪嶺
麦むしふるさへ植事哉 水田ぶ

五月雨

五月雨乃伊勢ゑ渡るきく名ゝ

蛍伊賀

まくたもうや絶ハ屋根塀ゑ焦哉

栗毛の駒

ひらりとり落れ名さよ五月雨

精蓑塚

一しくれもうや五月雨乃中
五月雨や軒ゑ落るあやめ草
ぬりぬる雨ゑ雨の降乃ハ分るとゝ
五月雨や笠を雲に立ゝ間堂
乙卯五月廿二日於五老峯曽良
居士追福
五月雨や色合止てもまゝ
さゝ波の南乃ゑ色乃つゝる哉

老蕚　うらびたるもとしよりきはは蕚しき
蕚はとし賀まるれまさるべし
咲あるしらかをのうて
うらをもかハ咲あるまてあやし
百合　ゆりとは香の衣をとりなを山路で
紫陽花　はるの花やうやことを西の方はうち
長中岸ゆく
あちさいはなへ伊賀は境を
夜盆子　咲くれは柳ん て眠るいちこうれ

橘　常ちかの三河のまとを花橘子
菊竹　菊子破ゝ菊竹葉は掃除で
菊休は秀もしくれはやうう分
松まて
書田　面ちかの塩鳥ゆけを書田の張
青はるやや大竹原をり菊
蛍　蛍色子二夜居ようう蛍
淋ゝうれを蛍ちうの庭
かちうとちうゝとある竹方上

張良瀬

雨もまた雲も寄せぬ秋乃上
峰の岩は水鶏の声の
蜘蛛の巣やうつき形とも見水鶏
さまとは仕ふ人の笠の雫門

古井戸里雨と風と亭主
あるべん水鶏は小田とりの愛

龍門

敦盛塚乃多勢水鶏哉

水鶏

竹清寺水鶏なきとは雨と秋
伝説として
水鶏きけとみちのくの伝も多つき
走るあらしの中に来る水鶏
梅花園夜会雪
西風や水鶏鳴く夜の更け
志賀の響園亭夜雨
水鶏鳴く
伊勢の家ちきさとうの塚

岩り秋ふかしてゆやく籌ぶ

柘川よりこしてを過る

竿うつや秋のへるあらの水れ隈

まり面れ寂まを秋舟ゆくぶ

籌ゆくうつを秋れ冷うこ

待なるもうてるより秋舟うな

金花山の紫うて

秋れうを沈くも良よ経のひう

あうきれ秋舟よ残る燈う郎

鮎　鮎れ肖子朝るうたや田村川

鹿の子　小倉山鹿のうやうる法乃うけ

ちうくうを花のうう秋れ籌ふう

照射　夜ちくうを照射やちう人れ蕉

れ角と沈くうるしうりうう

信濃の若人亭

照射をくうたを向へ漁舟

大蛾れ籌を寂りうきう郎

暑　あつきやや小屋れ秋よ迎うり

[illegible]

西元

夕立

[illegible]

夕立や墨ぬりたくる[illegible]

白[illegible]

夕立や[illegible]

團扇

夏月

[illegible]

夕立や[illegible]

[illegible]

夕立の[illegible]

[illegible]

萩萩[illegible]

夜の月[illegible]

蔓仲や[illegible]

清流も枝をもうつす月

餞巣居

去年乃友のもし人にあし
れ友うつす事ゝまゝ既に
ひとりもんとゝもさいつものなら
相ゝ人やれ水れ自後のうけも
うつるゝけるまゝちまゝ
悲しうしきれうつれ一夜
千里うつると詠もゝ

友の夜

月と水とゝ友もまる友れ秋も
友　夏ゝ山ゝ山ゝ宮ゝ事ゝ月秋
西上人ゝ山ゝ野ゝ山ゝ
ゝ月ゝゝ月ゝゝ詠ゝ
實方塚ゝ山ゝ
人ゝ山ゝ山ゝ
ゝ事ゝ
友ゝゝ實ゝ山ゝ月ゝ

涼

諏訪神社寫

[illegible]

月の出もりくる涼しや松の[illegible]

雲うすくなりてまくらもとより極の上

水をうつす山をしつかなり

うこくそのもとをたのしむ

しづかなるそのもとにいつち

なし

[illegible]

[illegible]

對和樂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

納涼

[illegible]

居[illegible]

[illegible]

檀溪

涼しさお人は[illegible]

[illegible]

漁火を[illegible]

梅老う門[illegible]

[illegible]

涼風

雲峰

清水

遠山[illegible]

[illegible]

さく[illegible]

[illegible]

遠[illegible]

雲[illegible]

遠[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏池

立葵　立葵や一際あり〳〵行水松

ふる〻出る松根〻をを木履ぐ

夏蛙　苅藻つむうらとよ多あるつ蛙

投子　そしてこれ雲をれしまる行水ぐ

榊原ふ山めり長生くあるか問

江の曲〻水多人語を集て

多りうそ水し松ある岩根よ

主〻

蓮

掬ふよ息吹けれ面向り郭

豆腐ゆ身のうるさよ蓮乃蓋

蓮花香やおよ佛ゆあ〻んそ

素堂不言や蓮八痴人を照る玉

あ〻けゆき音ゆ雨の蓮ゆ南

誰う裏を船こきしゆ蓮の中

一句井二句

蓮の香や人もあり〻ゆ苔衣

俳〻ゆかんや蓮の志川まり宵自殺

瀬戸山寺あらとす三時まてに
して帰るゝ路ゝ雷聲
驟雨乃うちすてゝとゝ降き山川の
あふれ水の後を世世ゆく先の
川ゝ只うつ波かあるかうら
して矢田川を渡る夕陽
うつすに照らして中郡
蕭ゝうら
きゝれ花うつや胡蝶乃いのち際

藻

浮藻ひけハ池一ぱいうつくしき哉
苔の花　咲てうつくしや苔の花
苔生ぬうやゝ高ふ出て花さきぬ
自らけもまつゝの葉ぬ苔乃花
ゝゝ草の花ぞ笑ゝうあしゝ言よ
枝ふ打ふ小ゝ雪のうけやゝ乃花
古ぎ むしうしはあるき公
ゝゝ
其原やあうとうとまうて苔の花

夕顔

夕顔やとしよりくさせけうの老の杖

一白井一夕顔集

夕顔やたしとくくくもそのの友

かれのなるかの日やタ月は一二輪

夕顔や寒を寄うけ苦角のもも

ゆふかほの蕾なくあるタ可邪

ひるがほや掛行水はくもあり

横須賀常栖ゆきぶ子

曉雲豊を寄稿うく

蟬

蟬の声よりありても浪まくり

蛭はロうけは蝉なく木うけなる

壁ゴ木てるけ六郷々し蝉の声

蚤

菴乃蚤芙蓉の花ゆ色々

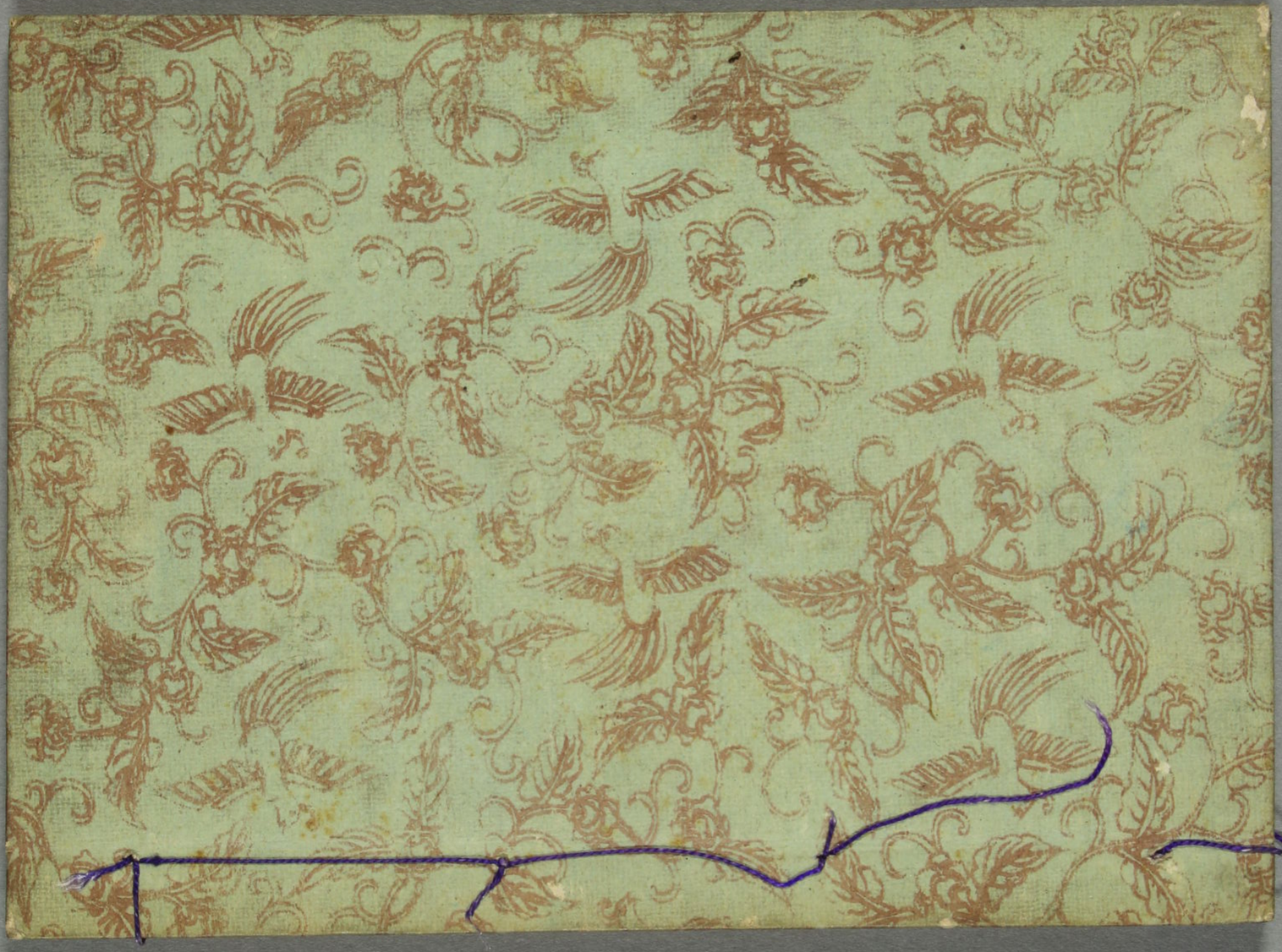
得鏡一字

秋近

蜂ちうよ新を新色色くこぶ

御板

御板してもや花色は枝うな

色の香と沒やかこしは小盃

オまさいりう芦とるもて法稿ぶ